

「思想」と「遊び」

坂口安吾晩年の諸作品の根底にあるもの
‘Thoughts’ and ‘Play’
What lies in Sakaguchi Ango’s later works.

中 畑 邦 夫

Kunio Nakahata

Abstract *The main purpose of this article is to show one possible way in which thoughts exert influence on reality, or how one can approach reality with his or her own thoughts. In other words, I try to show a possible relationship between thoughts and practice. In this article, I take up Sakaguchi Ango’s works in which he gave concrete form to this idea, especially the works in his later years. After the Pacific War, he went through some ‘crises’, and from them, he found a new way to write, or to practice his own thoughts. It was far from what could be called ‘political’ or ‘systematical’, but his new way could simply be called ‘play’ or ‘asobi’ in Japanese. In this new way, like a clown, he recognized reality as what to laugh at, and showed his readers the reality as such.*

キーワード：坂口安吾、安吾巷談、茶番に寄せて、晩年、ニーチェ、ツァラトゥストラ

学際領域：哲学、日本文学

1 はじめに

1889年1月3日、ニーチェがトリノの往来で発狂したエピソードはよく知られているであろうが、それに先立って彼は知人等に宛てて次のような手紙を送っている。

わたしにとって不愉快であり、わたしの憤み深さを傷つけるのは、歴史のなかのあらゆる名前は結局私だということです。同様にして、わたしが世に生み出した子供たちについてもいえば、状況はあまりかんばしいとはいえず、『神の国』に入ることのできる者たちはみなもともと神からやってきたわけではないと、或る種の不信感を抱きながら自問するくらいです。

この秋の間、わたしは可能なかぎり貧しい身なりをして、二度続けてわたし自身の埋葬に参列しました。最初はロビランテ伯爵として（——いえ、彼はわたし

の息子です、わたしが、わたしの本性には不忠実なカルロ・アルベルトであるかぎりにおいて)、でもわたし自身がアントネルリでした。

アリアドネ王女、わが恋人へ

わたしが人間であるということは、一つの偏見です。しかしわたしはすでにしばしば人間どもの間で生きてきました。そして人間の体験することのできる最低のものから最高のものまで全てを知っています。

これらの手紙は、一読しただけではまさにニーチェの狂気を物語るものであるとしか思われないうであろうが、山口誠一氏は、これらの書簡に積極的な意義を認めている。すなわち、「ニーチェの病気としての狂気は、何よりも、フロイト流にいえば、現実原則が除去され、快楽原則が優勢になっていることに見られる」¹⁾。しかしながら、「現実原則が支配する意識的世界と、快楽原則が支配する無意識的世界を逆転させることは、発狂以前にニーチェが語っていたことだった」のであり、「ニーチェの手紙は、発狂以前のニーチェの思索と連続している」と、山口氏は論じておられる²⁾。特に最初に挙げた手紙には「歴史のなかのあらゆる名前は結局わたしたち」という考えが読み取れるのであるが、それは「命名による変身」という考えであり、「わたしは唯一の我であるという現実原則をはっきりと否定する」ものであって、このような考え方は、たとえば発狂する前に書かれた『ツァラトゥストラ』の中の次の文章の中にも見られると、山口氏は指摘しておられる³⁾。

人類の歴史を総体として自己の歴史と感ずることのできる者は、何もかもをおそろしいほど普遍化することによって、一切のあの健康を想いやる病者の傷心を、青春の日の夢を追うあの老翁の悲哀を、恋人を奪われたあの恋する者の悲嘆を、その理想が潰え去ったあの殉教者の憂悶を、何一つ決着しないまま身に傷を負い友を喪うに到った戦闘の夕べにおけるあの英雄の心痛を、ことごとく一身に感ずるのである。

また、二つ目に挙げた手紙についても、次のように発狂以前のニーチェの思索との連続性を指摘しておられる。

ニーチェは『ツァラトゥストラ』で、自分の灰を運ぶツァラトゥストラという表現を繰り返していた。それは、分身の思想なのである。この虚構が手紙という現実に姿を現している。当該書簡の内容がこれまでのような物語として表現されていたならば、それは狂気といっても思索として理解されたであろう⁴⁾。

1) 山口誠一氏『ニーチェとヘーゲル デイオニュソス哲学への地下通路』(法政大学出版局、2010年、p. 202)。

2) 同上。

3) 同上。

4) 同上、p. 203、傍点は論者による。

本稿は、副題が示す通り、坂口安吾について論じることを目的とするものである。それをなぜニーチェについて論じることから始めたかといえば、それは私が、実際に発狂してしまうまでにこのような手紙を書き続けたニーチェと、晩年に新たな執筆スタイルを実践した安吾との間に、「近さ」を感じるからである。両者はともに、そのような状態に至るまでに様々な危機的状況を迎えてきた。ニーチェの場合には、アカデミズムの世界における挫折、ヴァーグナーへの期待と失望、そして迫り来る狂気。本稿で以下に論じるように、安吾にも心身両面において、まさに「正気の沙汰」とは思われぬような行動も含めて、いくつかの危機的状況が訪れた。しかし安吾の場合は、別様の「表現手段」と出会うことによって、作家として活動を開始した当初から抱き続けてきた「ナンセンス＝狂気」と紙一重の「ファルス」の精神を維持しつつ、執筆を続けることができたのである。

本稿の目的は、晩年の安吾の諸作品、すなわち、いわゆる「巷談」、「歴史もの」、「探偵もの」が、安吾が危機の中で出会った、自身にとって最適な表現手段を駆使して生み出されたものであったと解釈した上で、安吾をそのような諸作品を執筆することへと駆り立てたものが何であったのかを示すことである。それは、端的に言えば、「遊び」へと純化されたファルス精神である。

以下、本格的な議論を始める前に、次節で本稿の概略を示す。

2 思想と実践の、一つの可能性

本稿の目的を一般的なかたちで端的に言えば、思想と現実との係わりの在り方についての、さらに言えば、人は自らの思想を通じてどのように現実に関与することができるかということの、一つの可能性を示すことである。思想を実践する在り方の、一つの可能性と言っても良い。私が本稿で主に戦後から晩年にいたるまでの坂口安吾をそしてその諸作品の基底にあるものについて論じるのは、安吾がまさにそのような可能性を具現化した人物であると考えからである。思想を通じての現実への働きかけといっても、私はそのような表現によって、たとえばサルトルが主張したような意味でのアンガージュマンのようなものを意図しているわけではない。そういった活動は現実への「政治的な」働きかけであり、同じことだが、そのような働きかけの対象とされる現実もまた、たんに「政治的に」捉えられたものとしての現実であるにすぎないからだ。安吾は、政治的なものを徹底的に嫌悪していた。本稿では詳細に論じる余裕はないので、ここでごく簡単に論じておくにとどめるが、「政治的」とは、たとえばたんなる「党派性」のようなものを意味するのではなく、より広く、現実をどのようなものとして認識すべきかということを決定し、さらには人々の間にそのような認識の仕方を侵透させようとする、そういった在り方を私は「政治的」という表現で意図しているのである⁵⁾。あるいはこれを「制度的」と言い換えても良いであろう。安吾は明治期以降のいわゆる文化人や知

5) この問題にかんしては、拙論『「墮落」と「救い」の逆説—坂口安吾『墮落論』について—』(『麗澤大学紀要』第92巻、2011年7月、p. 147～p. 164)等を参照されたい。

識人の多くの取った態度を、そのような意味で政治的あるいは制度的だと見なし、嫌悪していたのであった。安吾は常に、小説において間接的に、そしてエッセイ等において直接的に、そういった文化人や知識人の態度を批判し続けたのである。逆に言えば安吾は、彼らの態度を批判することによって彼らとは全く別の独自の現実認識を、言わば消極的に、示そうとし続けていたのである。しかし戦後の「危機」を経て、安吾は晩年に至って積極的に、自らの思想を通じて現実に働きかける新しい方法を、たんに「論じる」のでも「主張する」のでもなく、「実践する」ことになる。その方法とは端的に言えば「遊び」である。今や、彼にとっての現実認識は、制度的なものを否定することによって主張されるのではなく、あるいは制度的なものを否定することによってやはり別様の制度的なものとして示されるのでもない。現実を笑うべきものとして彼自身が楽しんで認識し、またそのようなものとしての現実を作品において読者に示すことによって読者を喜ばせようとした、彼はそのようなことを試みたのであり、それが彼にとっては自らの思想の、現実における実践となったのだ。

次節ではまず、終戦直後に安吾に訪れた「危機」とはどのようなものであったのかを示す。

3 安吾の「危機」

終戦直後の1946年、「墮落論」、「白痴」を発表し、一躍人気作家となった安吾であるが、それは安吾にとっては危機の始まりでもあった。一つには、その後の乱用にもつながる薬物使用がある。人気作家となってしまった以上、必然的に仕事も増えてゆくわけで、安吾はアドルム、ヒロボンといった薬物を服用しながら仕事をこなしていったのである。さらに、1948年、盟友である太宰治が自殺した頃から、安吾は鬱病的精神状態に陥ってしまう。そのような状況の中、アドルム、ヒロボン、ゼドリンといった薬物の服用量はさらに増えてゆき、病状は更に悪化、幻聴や幻視も生じるようになる。そしてついには、1949年、京都へ行った後に狂乱状態となり、その翌月には睡眠薬中毒と神経衰弱で東京大学医学部附属病院に入院することになる。退院後も、しばしば薬物を乱用することがあり、そのことが原因で友人と絶縁することにもなった。また他方で、1951年、国税庁に対して税金不払い闘争を起こし、さらに後には伊東競輪不正告訴事件を起こす。明らかに常識に反すると思われるこのような行動も、薬物の乱用等によって精神的に不安定になってしまっていたゆえであろうか。たとえば青柳達雄氏は次のように論じておられる、「年譜を繰るまでもなく、安吾はこの年五月税金滞納で家財、蔵書、原稿料まで差し押さえられ、国税庁と対決する〈税金闘争事件〉、次いで九月には競輪の不正に怒って告訴状を出すという〈競輪事件〉を惹き起こしている。夢想が現実生活を侵略しはじめ、被害妄想にとりつかれた甚だしい時間とエネルギーの消耗を強いられていた」⁶⁾。

6) 『「安吾新日本地理」考』（久保田芳太郎、矢島道弘編『坂口安吾研究講座II』、三弥井選書、1985

なぜ安吾がこのような状況に陥ってしまったのか、その原因として戦争体験を挙げる論者は多い。戦後の安吾の活動への戦争体験の影響について、たとえば神田重幸氏は福田恆存氏の所説を援用しつつ、次のように論じておられる。

安吾の文学は独自の文明批評、批判を通して、それが観念的であれ実験的であれ、そこに人間の存在論、いわば実存の問題に立ち入ろうとする点に集約される。彼が文学的出発点でファルスの文学を説き、戦後「墮落論」、「白痴」（新潮）昭21・6）等で示した主張は、そういう論理の実践であり、作品化であったとみてよいと思う。もちろんこのような文明批評家としての立場の背景には、彼の生き活動した時代の状況、とりわけ戦争体験による価値体系の変貌という歴史的社会的現象が大きく作用していたことは否めない。（中略）しかしそれは福田恆存の指摘にもあるように、「たんなる偶然ではなく、坂口安吾自身のうちにその必然性があったのである。かれとしては、たまたま戦争の体験を通じて自分の必然性を究極にまでつきつめた」（『坂口安吾』『坂口安吾選集』第七巻解説 昭23・6、銀座出版社）にすぎないのであって、その意味では彼の文明批評家的な性格は、ほとんど資質的なものであったとも言ってもよいだろう⁷⁾。

神田氏の論じておられることを承けて考えれば、戦後の安吾の危機はそれまで作家としての安吾の活動を支えてきたものの危機であった、言い換えれば、作家活動の根底にあった安吾の思想そのものの危機であったということになる。久保田芳太郎氏は「坂口安吾—戦後のアイデンティティ—」において、このような観点から戦後の安吾の危機について詳細に論じておられる。

「生きよ、墮ちよ」という「墮落論」における表現に集約されているように、安吾は戦後の日本にある「期待」を抱いていた。久保田氏はその期待を、次のように表現しておられる。

死と「破壊」の戦争を通過した敗戦さらに戦後は安吾にとって、「予想し得ぬ新世界への不思議な再生」となって、人間というものが本来の「絶対の孤独」をかかえ込んで真の人間らしきないし存在となるはずであった。あるいはそこにこそ彼にとって「再生」の希いや可能性、すなわち換言すると外部的な政治革命ならぬ、人間存在とその内部意識の革命があったのだ⁸⁾。

ところがこのような期待は裏切られる。久保田氏は裏切られた安吾の心境を、戦後の未完の小説『花妖』における主人公・木村修一の想いを解釈することを通じて論じておられる。

年、p. 141)、傍点は論者による。

7) 「坂口安吾の文明批評—晩年の作品にふれて—」（久保田芳太郎、矢島道弘編『坂口安吾研究講座III』、三弥井選書、1987年、p. 126～p. 129）、傍点は論者による。

8) 「坂口安吾—戦後のアイデンティティ—」（前掲『坂口安吾研究講座II』、p. 5～p. 7）、傍点は論者による。

然し修一は敗戦の絶望感が生み出した人間の姿を芳枝にも見出さずにはいられなかった。あらゆる権威が失墜した。その地盤から芳枝が生れているのだが、あらゆる権威の失墜は、芳枝自身が血肉を賭けて突きとめた思想でなしに、混乱の時代感情を地盤にして生えてきた思想の葎にすぎないのだ。

いったい時代の人形でない人間などがあるのだろうか？ 時代的な地盤をはなれて、血肉のこもる思想から生えてきた本当の葎などがあるのだろうか？

修一はわが生き方の軽薄さに絶望せずにいられなかった⁹⁾。

久保田氏はこのような修一の感慨が「おおむね作者のものであると考えられる」とし、次のように論じておられる。

ここには敗戦後の「あらゆる権威の失墜」が自分自身の「血肉を賭けて突きとめた思想」ではなくて「混乱の時代感情を地盤にして生えてきた思想の葎にすぎない」ものであるかと、すなわち独自のものではなくて相対的なものであったことが述べられているのである。さらに換言すると、戦後のむき出しで赤裸々な人間存在及びその孤独の思想がほんものではなくていわば混乱が生んだ風俗現象にしすぎなかったということの認識であったのだ¹⁰⁾。

久保田氏によれば、このような認識によってもたらされた失望によって、神田氏が「ほとんど資質的なもの」と評した、安吾の作家活動の根本動機とも言えるものが枯渇してゆくことになる。久保田氏は次のように論じておられる。

安吾自身が内包していた、独自の「存在そのものの虚無性」(昭和一一・六・一七、矢田津世子充封書)が外延して、これまでみたように戦後社会の人間像をも内包するものと彼は期待していたわけであったが、ここへきて彼が念じていた「絶望」(安吾が「墮落論」等で主張したものとしての「墮落」と言い換えてもよいであろう 論者)への期待が風化されてしまって裏切られてしまったことを意味するのである。さらにその戦後の時点からこそ、人間造型とその可能性ならびに文学的ロマンを賭けた安吾にとって、以上のことはまちがいに挫折であった。いいかえると「絶望」に「絶望」したわけであったけれども、そうすると「絶望」も相対化されてしまって単なる失望となってしまう。そして戦後の混乱が収まっていけばいくほどその彼の夢想と期待が地に落ちて失望と化してますます「再生」が不可能となってしまうのであった¹¹⁾。

戦後、安吾は書くことを通じて「再生」を描こうとした。しかしながら久保田氏によれば、そのような試みは上に引用したような事情によって不可能となり、安吾

9) 同上、p. 9、傍点は論者による。

10) 同上、p. 9～p. 10、傍点は論者による。

11) 同上、p. 10、傍点は論者による。

が戦後に書いた小説は「おおむね失敗作に終わっている」¹²⁾。久保田氏はまた、戦後の安吾においては「夢想や観念だけが空転してしまったのだ」と論じておられるが、このような事態はまさに、「オモチャ箱」や「牧野さんの死」において、安吾自身が晩年の牧野信一の在り方を批判した際に根拠として挙げていたものなのであった。このことにかんして、関口安義氏は『『オモチャ箱』論』において次のように論じておられる¹³⁾。

作者は三枝庄吉という主人公の生き方を、冷静な観察者の眼でとらえ批判することで、自身を含めた芸術家の弱点を衝いているのである。〈夢〉や〈幻想〉についての作者の考えは、「どれほど幻想的でも、作品の根底には現実性が必要で、現実^に根をはり、そこから枝さしのべ花さくものが虚構である」という一点に尽きる。虚構は現実^に根づかない限り虚構たりえないと言うのである。三枝庄吉は現実^に根づかない夢を見はじめ、結局〈夢〉と〈現実〉とのギャップを支えることができなくなった。そこに悲劇が生じたという解釈が出現する。

久保田氏は挫折後の安吾の執筆活動について、「どす黒い虚無の翳をかかえて戦後^の人間像をファルスとして笑いとばすしか仕方がなかった」¹⁴⁾とし、「しだいに純文学から遠ざかり、歴史もの、『明治開化安吾捕物帳』『安吾新日本風土記』などを書くにいたる」理由も「現代小説における虚構とロマンが不可能になったからだ」と推測しておられる。

4 「道化」から「巷談師」へ

前節で見たように、久保田氏は安吾の晩年の諸作品を消極的にしか評価しておられない。しかしながら、久保田氏が指摘された安吾の危機を認めたくうえで、晩年の諸作品を安吾が出会った新たな表現形式において執筆されたものとしてむしろ積極的に評価する論者も多い。発表された年代は前後するが、以下、そういった議論のいくつかを見ておこう。

山敷和男氏は、『安吾巷談』の意義について、次のように論じておられる。

安吾は、これ（『安吾巷談』論者）を書くことで、ひとつの発見をしたに相違ない。即ち、フィクションでなく、まったく身近なことを材料として何か書いても——もちろん、無批判、無差別に書くのでなく、トピック・ニュース的なことを、多少か、かなりか批判的に、しかし、またからかい気味に書くことによってであるが——とにかく、何か文学作品めいたものが書けるのであった。これはうつ病後の安吾にとって、執筆の際の大きな利益であったろう¹⁵⁾。

12) 同上。

13) 『『オモチャ箱』論』（同上、p. 78）、傍点は論者による。

14) 久保田氏前掲論文、p. 11。

15) 『安吾巷談』の繁昌記的性格（前掲『坂口安吾研究講座III』、p. 117）。

また、久保田氏は安吾の戦後の諸作品におけるファルスのなものも消極的にしか解釈されていないようであるが、竹内清己氏は「安吾と世相」において、戦後における安吾の諸作品においてもファルスのものは積極的なものとして生きていたということ、さらには安吾がファルスのものにそれまでとは別様のかたちを与えようとしていた、あるいは与えざるをえなかったということを描いておられる。

「世相」と「人間」を橋渡しにしてみつめること、そこから敗戦、戦後の安吾文学は出発した。その両方を肯定しようというのが安吾文学だが、これは出発時からのファルス論の継続である。(中略)しかし、敗戦、戦後の世相が身に近いだけ、自己の文学が世相そのもののなかでうけに入っただけ、そこにみえてくるものにおのずから別様のものがあつたはずである¹⁶⁾。

さらに松本徹氏は「坂口安吾の歴史観」において、安吾が晩年に出会った「巷談師」というスタイルを、非常に高く評価している。

安吾は自ら「巷談師」と称した。そして、「巷談師」についてかう述べてゐる、「所詮口座の道化者で、オナグサミに一席弁じてゐるにすぎないのである。天下国家を啓蒙しようといふやうなコンタンが(中略)ミジンもないから、手頃な題材が見つけて、勝手放題な熱をふく」(『安吾巷談』の最終回「巷談師退場」)。また、「どうも、巷談といふものは、私に最も身についた遊びのやうである」とも、「巷談は私のオモチャです」とも云つてゐる。

この文章自体、「オナグサミに一席」といつたところがあるが、大事なことはちゃんと云つてゐる。すなはち、語ることによつて、聞くひとを樂しませるとともに、自らもまた樂しんでゐるといふことである。この自ら遊び楽しむことこそ、「オナグサミに一席」と云ひながら、読者に迎合しないことを可能にしてゐるに違ひない。俗の泥に身を漬しながら、それに汚れず、精神の貴族性を保つてゐる。そして、その「遊び」といふ無目的性によつて、なほさら自由に振舞い、読者をその運動に巻き込んでいく¹⁷⁾。

引用した箇所、松本氏は直接的にはファルスに言及しておられないが、ここに示されているような在り方が、まさにファルスのことであることは間違いないであろう。

5 結びに代えて

山口誠一氏は、やはりニーチェが発狂の直前にヴァーグナーの妻コージマに宛てて書いた手紙について論じておられる。

16) 「安吾と世相」(前掲『坂口安吾研究講座II』、p. 191～p. 192)、傍点は論者による。

17) 「坂口安吾の歴史観」(前掲『坂口安吾研究講座III』、p. 223～p. 224)、傍点は論者による。

この日頃の、神々しいハンスヴルスト〔道化師〕とかいう人物がディオニュソス-讃歌を成し遂げました……。

山口氏によれば、ここで指示されている「ディオニュソス讃歌」は、『ツァラトゥストラ』のなかに含まれている詩を改訂したものである。その詩の冒頭の「多彩の仮面をかぶり、／己れ自らを獲物となす者、／これが—真理の求愛者とや？……／道化たるのみ！ 詩人たるのみ！」という一節をふまえて、山口氏は次のように論じておられる。

ディオニュソスは、仮面をかぶって偽る道化にして詩人なのであり、真理を追求しない。迷宮を追求する。真理自体が虚構である以上、真理の追求者としての哲学者は、道化となる。真理を追求しつつ、それを笑う。これがニーチェの行為論の最終局面である¹⁸⁾。

矢島道弘氏は「坂口安吾・修羅の相貌—戦後作品の流れ—」において、安吾が「巷談師と化すことにより現実としての道化師と転じていった」と論じておられるが、そもそも「道化」とは、安吾が作家活動を開始した初期の頃から、ファルスを具現化する在り方として論じていたものなのである。

正しい道化は人間の存在自体が孕んでいる不合理や矛盾の肯定からはじまる。警視総監が泥棒であっても、それを否定し揶揄するのではなく、そのような不合理自体を、合理化しきれないゆえに、肯定し、丸呑みにし、笑いという豪華な魔術によって、有耶無耶のうちにそっくり昇天させようというのである。合理の世界が散々もてあました不合理を、もはや精根つきはてたので、突然不合理のまま丸呑みにして、笑いとばして了おうというわけである。

だから道化の本来は合理精神の休息だ。そこまでは合理の法でどうにか捌きがついてきた。ここから先は、もう、どうにもならぬ。—という、ようやく持ちこたえてきた合理精神の歯をくいしばった洪面が、笑いの国では、突然赤禪ひとつになって裸踊りをしているようなものである。それゆえ、笑いの高さ深さとは、笑いの直前まで、合理精神が不合理を合理化しようとしてどこまで努力してきたか、そうして、到頭、どの点で兜を脱いで投げ出してしまったかという程度による¹⁹⁾。

伴悦氏は「安吾の合理性」において、「笑いは不合理を母胎にする」という一節に注目し、道化と「合理性—不合理性」との関係について、詳細に論じておられる。氏の見解は、安吾が諷刺について論じている次の一節を解釈することを通じて示されている。

18) 山口氏前掲書、p. 24、傍点は論者による。

19) 「茶番に寄せて」(『墮落論・日本文化私観 他二十二篇』、岩波文庫、2008年、p. 78～p. 79)。

然し、諷刺は、笑いの豪華さに比べれば、極めて貧困なものである。諷刺する人の優越がある限り、諷刺の足場はいつも危く、その正体は貧困だ。諷刺は、諷刺される物と対等以上であり得ないが、それが揶揄という正当ならぬ方法を用い、すでに自ら不当に高く構えこんでいる点で、物言わぬ諷刺の対象がいつも勝を占めている²⁰⁾。

この一節に対する伴氏の見解は以下の通りである。

諷刺する主体に少しでも「優越」の片鱗でもあろうものなら、足場はふらついてしまうことをいいたいのだ。すべては「優越」が元凶であることを強調したいのである。対象をもっぱら否定することから発想される諷刺は、開かれた「豪華」な笑いからすれば、邪道に通じていたであろう。

こうみると合理性から発せられる諷刺よりも、矛盾や不合理を肯定する道化に、重心をかけていたことがわかる²¹⁾。

安吾は「巷談師」としてあるいは「道化」として、決して世俗の世界を諷刺するのではなく、言い換えれば世俗に対して自らを優越した立場に置いて世俗を否定するのではなく、前節で引用した松本氏の表現を拝借すれば「聞くひとを楽しませるとともに、自らもまた楽しんで」いたのであった。

先に引用した山口氏の見解における「真理の追究」を「合理性の追究」と言い換えれば、安吾の論じたファルスを具現化するものとしての道化は、まさに合理性を追求しながらも道化なのであり、また、合理性を追求しつつ、それを笑うのである。そして安吾はみずから「道化＝巷談師」として、現実へと向かってゆく。ここ

20) 同上、p. 79。

21) 「安吾の合理性」(前掲『坂口安吾研究講座Ⅲ』、p. 201～p. 202)。なお、本稿では詳細に論じる余裕はないが、伴氏はファルスのこのような合理性批判の側面が、安吾が明治以降の知識人や文化人を批判する際の武器であったと解釈しておられる。長くなるが氏の見解を以下に引用しておく。「すでにみてきたように諷刺には対象への『否定』から出発する意味で、『優越』と『貧困』をあげきたた安吾は、こんどその矛先を具体的に島崎藤村や、夏目漱石、それに横光利一といった時代を画した代表的先輩作家たちにむけることになる。まず藤村や利一に対しては『要するに彼等はある型によって思考しており、肉体的な論理によって思考してはいないことを意味している。彼等の論理の要点はそれ自らの合理性ということで、論理自体が自己破壊を行うことも、盲目的な自己展開を行うことも有り得ないのである。』(傍点筆者)と批判する。ここで肝心の批判の要点は何かといえば、対世間的な意味でツジツマの合った自らの合理性に居座った、いわば自己目的固着の論理への陥没とみる姿勢であろう。安吾はなにより対世間的につくられた『優越』の論理の表皮を剥ぎとりたいたいのだ。漱石についても同様に、『彼の知と理は奇妙な習性の中で合理化という遊戯にふけているだけで、真実の人間、自我の探求というものは行われていない。』といい、『戯作者文学論』の中でも批判は執拗をきわめている。『人間関係のあらゆる外部の枝葉末節に実にまんべんなく思惟が行きとどいているのだが、肉体というものだけがないのである。そして、人間関係を人間関係自体に於て解決しようとせずに』『自殺だの、宗教の門をたたくことが、苦悩の誠実なる姿だと思ひこんでいるのだ。』といい、これは『軽薄な知性のイミテーション』のしからしめるものだと極言している。漱石の描く『宗教』や『自殺』に『軽薄な知性のイミテーション』というレッテルを貼りつけたあたりは、いかにも坂口安吾らしい口吻といえるだろう。もちろん安吾自身にとっては、大言壮語と映るような性質のものではなかった筈である。少なくとも『自殺』ということなら、すでに飽くことなく死の強要をせまった友人長嶋翠との交感において、その凄惨ともいふべき儀式をすませていたからだ。そこから得られた『自殺』という虚勢への唾棄であったろう。生きのこった安吾にあっては、『自殺』さえ『チャチな優越』(『暗い青春』)でしかなかったのである。しよせん『自殺』は『茶番』の異名にすぎなかった。そうした背後には、宿命的とも思える『青春自体が死の翳だから』という抜くべからざる認識がひそんでいたのである(同上、p. 206～p. 207)。

でもまた山口氏の表現を拝借して言い換えれば、そのような在り方こそが、安吾が晩年においてたどり着いた、作家としての最終局面だったのである。

執筆者紹介

中畑邦夫 麗澤大学経済学部非常勤講師。上智大学大学院博士後期課程修了・博士（哲学）。「ヘーゲル論理学における『形式と内容』の変遷—理性という限界における消失と生成—」（学位論文）。